瓦版

天使突抜六丁目

号外

特集：映画『天使突抜六丁目』の音世界

「変な映画」の「和で不思議」な音楽

渡邉崇さん（音楽）と山田雅史監督に聞く

――渡邉さんは、本編クレジットでは「音楽」という記載になりますが、実際、本作で果たされた役割を具体的に教えてください。

▼渡邉　台本を読んで、監督から音楽のイメージを聞き出し、引き出し、それを具体的に形にしていくという作業です。あと音楽予算の管理もします。

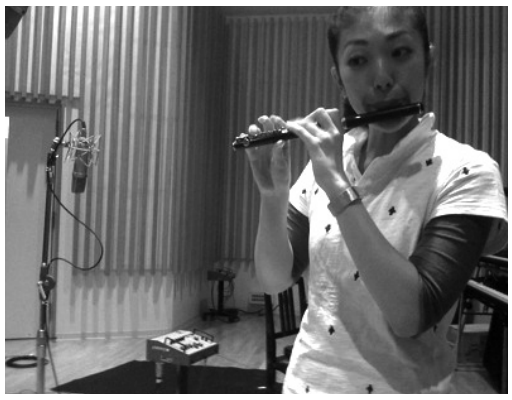
――山田監督と渡邉さんとで、どのような過程で作業を進めていったんでしょうか。

▽山田　たしか最初に台本とすでに使用が決まってた通崎睦美さんの音楽3曲を渡邊さんに送りました。あとは音楽がほしいシーンとそのシーンのイメージを伝えて渡邊さんに考えて貰うという進め方だったと思います。

▼渡邉　他の監督とやる時もそうなんですが、まず最初にどのような楽器、音色のイメージを持っているか、必要としているのかを聞きます。アコースティックなのか、デジタルなのか、土着なのか、ギターなのか、ピアノなのか等など。「変な映画にしたい」と監督が言っていたの憶えています。予算と照らし合わせながら、楽器編成を決めつつ、作曲に入ります。演奏もアレンジも素晴らしい通崎さんの曲が映画を支える安定した音として在ったので、こちらは心おきなく「変な音楽」を創る事ができました。

▽山田　この作品は「京都連続」というシリーズで「京都の変な通り名をタイトルに変な映画をつくる」というテーマ（少なくとも最初は）だったので、音楽も「変な音楽を」という言い方しか出来なかったのですが…。細かく言うと、確か僕の中でのイメージとして京都の映画、日本的な音、民族的な音楽、楽器。方向性としてはその辺でしたね。僕は映画の中で音や音楽はものすごく大事だと思っています。そのシーンの演出の役割も当然ありますから。僕が役者さんにまじめにいいシーンなのでそのように演じてくださいと指示したシーンでも、その時点で「バカバカしい音楽をつけてやる」とすでに企んでいる時もあります。これは絵と音が合わさった時の絶妙なバランスを狙ってます。今回も何というか、「えもいわれぬ雰囲気」がものすごく気に入ってます。麿赤兒さんのシーンの祭囃子なんて実にバカバカしい。

▼渡邉　祭囃子の音楽に入っている「よ〜〜！」っていう合の手は監督自身によるものですよね。録音の時に、僕も録音ブースに入っていたのですが、笑いをこらえるのに必死でした。横を見ると、同じく録音ブースに入っていた打楽器奏者のアサダさんも笑いを必死でこらえていて、それを見てまた笑いがこみあげてきて…という悪循環。そういう「笑いをこらえるのに必死！」という空気があの曲には封印されました。



――山田監督の演出というのが、やはり楽曲制作においても独特なものだったんですね。

▼渡邉　先ほどの答えにも被るのですが「変な映画にしたい」という監督の言葉がとにかく印象的でした。あと、山田監督って画が綺麗で音の使い方がシリアスで美しい監督なのに、どこかに可笑しさ、笑いが潜んでいるという印象を僕は持っています。なので、その可笑しさを音楽にもブレンドするのか、それとも音楽はシリアスにいくのかという質問をしたのを憶えています。監督がそれに対してどういう答えをしたのかは憶えていないのですが、出来あがったものから推察するに、祭囃の曲を除いては、シリアスにと答えられたんじゃないでしょうか。

▽山田　たしか昇とみゆきの絡みのシーンで素材を繋いで見たら何か素敵なないシーンになっていて、それはそれでいいんですが、「いいシーン」というのはこの映画にはいらなかったんです。何かこの映画では違う気がしてきて、それで奇妙な音を付けて不気味なシーンにして頂きました。「二人の愛」よりもその結果「巨大化するキュウリ」というのが重要だった訳です。今回の作品は特に観客に媚びる必要もわかりやすく作る必要もなかったので、音楽はだいたい画と逆をお願いしたと思います。面白おかしいシーンというのも監督それぞれやり方はありますが、僕は常に「シュールな笑い」という方向へ行きます。ただ一般的によく使われる「シュールな笑い」というのではなく、もっとシュールになります。マグリットの『鳥を食べる少女』という作品がものすごく好きなんですが　僕が思うにこの絵が笑えるという事ではなく、この絵が教科書や美術館に飾ってあって、それを真面目に見ている人々を見たときにどうも笑ってしまいます。その感覚です。

▼渡邉　そうだ。絡みのシーンですよ。「いいシーンはいらない」というのは確かに作品を通して徹底していました。勿論、いいシーンはいっぱいあるんですよ。ただ、それが所謂誰もが想像するいいシーンではなくて、山田流なんですよ。それは初めてご一緒した『日暮れる窓』（＊06年制作の山田監督短編作）の頃から徹底してますし、監督の作品が好きな人は皆、そこが好きなんじゃないでしょうか。これはもう、言葉で説明は難しく、観ていただくしかない訳ですが。

――なるほど。では、実際本作を鑑賞してみて、あらためて発見できたことなどあれば教えてください。

▼渡邉　改めて山田監督の音の使い方の上手さを思い知らされました。

――山田監督、渡邉さん、双方から、今回の制作をともにしての感想を教えてください。

▽山田　渡邊さんとは『日暮れる窓』という短編で最初にやったんですが、その頃からやりやすくて、なんというか予算のない自主映画でも「楽しい」でやってもらえるという印象を受けました。とは言ってもきちっとクオリティの高い曲を作ってくれますから自主の監督からすると、とても助かるんです。いつかもうちょっと予算がある作品でお願いしたいとずっと思っていて『天使突抜六丁目』で久々にお願いしたわけです。といっても低予算なんですが（笑）。

▼渡邉　僕は様々な作曲スタイルを持っているんですが、山田さんとやる時はその中でも尖った部分を出せるので、毎回愉しみにしていますし、やりがいも感じています。「さあ、この攻めた作曲を施した曲を山田監督はどう画に合わせてくるかな」と。色々な事を考える方だと思うのですが、それに反比例した言葉数の少なさもなんだか魅力的です。ですので山田監督と打合せをする時は行間を読むのが大事です。予算の事をいうとあれなんですけど、予算はもう少し欲しいですね。山田監督に呼ばれたら、予算関係なく行きますけど。

▽山田　僕はオリジナル脚本の場合は最初に具体的なイメージがあります。これは音楽にだけではなく演出やカメラも。もともと個人制作で作品を作っていたからですが、ここ最近は映画は共同で作るものだと痛感しています。どんどんアイディアを出してもらえるスタッフとやるのはやはり実に楽しい。そういった点では渡邊さんとやるのは昔からですが大変刺激もあり楽しいです。「そう来たか〜！」という感じ。そうだからかもしれませんが、あまりあれこれ先に言うのがいやなんです。聞かれたら言いますけど。役者さんに対してもそういうところはあります。まぁそれだけにイチからやり直してもらうという事もたまに出てきますが。予算に関しては僕にはどうにも出来ないので大変心苦しいのですが、やはり僕が普段やっているのは低予算ばかりですのでつくづく悲しいときがあります。また来年か再来年、『天使突抜六丁目』のようなスタンスで作品を撮りたいなぁと思ってます。予算はそれほどないと思いますが、オリジナルの。それで、渡邊さんに勝手に質問なんですが、次、どんなものがいいでしょうかね？（笑）

▼渡邉　今回は「和で不思議」な感じだったので、「洋で不思議」な感じのものを山田さんとやってみたいです。「日暮れる窓」の世界観が好きなんですよ。絵画を観ているような感じがありました。そこに、ドビュッシーやサティとか、チャイコフスキーでもいいな、そういう曲を1曲選んでテーマに据える。シーンに合わせて、その1曲に様々なアレンジを施して変化をつけていく、というような作品をやってみたいです。これは映画音楽作家としての欲なんですけど、誰もが知っている歴史的な名曲と一つの映画を通して、とことん向き合いたい、勝負してみたいというのはあります。あくまで僕の欲ですけど。

「匂いのする」「彫刻的」な立体音響

弥栄裕樹さん（『天使突抜六丁目』音響設計）に聞く

――弥栄さんは、本編クレジットでは「録音」という記載になりますが、実際、本作で果たされた役割を具体的に教えてください。

▼弥栄　文字通り録音してました。基本的にはセリフ、動きのニュアンスをとってます。音響や仕上げをする事は決まっていたので、撮影前に脚本や山田監督の作風から自分なりのイメージを作っていました。撮影現場にはポスプロに必要な音を収録しにいってるみたいな感じです。

――これまで弥栄さんはどんな活動をやってこられたんでしょうか。

▼弥栄　もともと大阪でバンド活動をやっていました。2004年に京都のサウンドクリエイター近藤君（soft aMadoo Final Drop etc...）と、ある企画で中国・貴州省に少数民族のフィールドレコーディングをしに行く機会があって、その時に彼のセンスと人柄に感銘を受けて自分のやりたい事が少しずつ見えてきました。それ以後は、国内外でのフィールドレコーディングを主軸にしたスタイルでいろんな形で活動するように意識しています。

そんな中、2005年に山田監督の『堤防は洪水を待っている』で映画製作にはじめて参加させてもらうことになり、この作品の仕上げでは監督と連日徹夜しました。手探りながらも音を紡いでいるうちに、映画の力と楽しさを知ってしまったがゆえ、いまも音響・録音・音楽という立ち位置で活動させてもらってます。

――本作には「音楽」担当として渡邉崇さんが劇伴（サウンドトラック）を作曲されていますが、弥栄さんは渡邉さんや他の楽曲提供されたアーティストと、どのような関係性で制作をされたんでしょうか。

▼弥栄　音楽に関しては、既に監督の方で音楽のイメージと配置したい場所ができあがっていました。渡邊さんの楽曲は、よくある感じの安易に心象を感じさせる音ではなく、瞬時に笑えたり、切なかったり、いろんな感情が同時に湧きでるような音でしたし、映像をグイグイ引っぱってくれたので、僕がやったのは音量バランスを調節した事ぐらいです。ただ、楽曲の良さを壊さず、ドラマと自然に絡めるように、ベースになるサウンドスケープや前後の音の入り方、効果の音色は特に気にかけました。

京都在住のアーティスト、AKI-RA sunriseが本作に楽曲提供してくれているんですが、それは以前、京都・鞍馬の魔王殿で彼のHang Drumパフォーマンスのレコーディングに僕が参加する機会があったのがきっかけです。その時のAKI-RA sunriseの演奏が早朝の自然の音と対話をしていたのが、強烈な印象として残っていました。彼は自作の楽器や世界中の楽器を自在に操り、多種多様な表現者と競演しているので、天使突抜六丁目のヘンテコな住人たちの在り方とマッチするんじゃないかとイメージしました。本作が京都を舞台にした映画作品ということもあり、AKI-RA sunriseの音を本作に起用してみたらどうだろうかと、僕から監督に提案しました。

――本作をシアター環境で観ていると、映像には見えていない（フレームには映っていない）物事が音響で立体的に立ち現れる、というようなことが度々感じられました。そのような効果の構想意図と実際やってみての感触を教えてください。

▼弥栄　山田監督の作品は独特の世界観があるので、スクリーンをはみ出した空間にも世界を構築したかったんです。それで、立体音響を採用しました。音は、撮影され切り取られたフレームの中に映る映像と違って、フレーム外の要素も入ってきます。自分はそういうものを排除するというよりは、むしろ味方にしてしまいたいと思う方なので、入り込んできた音を元に、いろんな音のレイヤーを追加する事も多いです。またフレームに縛られる事がないので、自由に設計できるのも強みですね。いろんな素材の音を彫刻して一つのサウンドスケープを作るわけですから、美術の感覚に似てるかもしれません。また、録音をしているときに、収録場所の雰囲気を記憶しておく事を意識しています。映画の現場もそうですし、フィールドレコーディングで訪れた場所の雰囲気や感じた事も一緒にアーカイブしているので、映像には見えない僕の思い出も映し出されてるかもしれませんね（笑）。

――山田監督の演出（作品）について、その特徴と、一緒に制作をしてみての感想を教えてください。

▼弥栄　山田監督とはずっと一緒にやってきて、バンドのメンバーみたいな感覚を持っています。なのでなかなか難しい質問ですね（笑）。常に感じている事は、監督の作品を見ていると子供の頃に感じた憧憬を見ているような感覚が不意にやってきます。現代をモチーフに扱っていても、現実の世界とは違う異世界の印象をすごく受けたりしますが、不思議とリアルなんです。時に退廃的な世界観であっても、変な仕草や変な映像が入って笑えたりするから人間味がにじみでてているというか。昭和の時代、自分が子供の頃に想像していた世の中の未来像に近いものを感じますね。フィールドレコーディングをしながらアジアを旅していてよく感じる事なんですが、アジアの中には、まだまだ日本がかつてそうだったであろう原風景や匂いを感じる場所があるんです。僕自身も経験した事がない時代や景色をなぜか感じてしまうんですが、絶対かつての日本もそうだったんだろうなと思うし、そうしたことを感じること自体、とても心地いいです。そんな感覚に近いものを持っている山田作品の紡ぐ美しさや可笑しさの根っこは、純度の高い人間臭にあると思いますね（笑）。そう山田雅史は臭うんです。そしてまた嗅ぎたくなる。

――実際本作を鑑賞してみて、ご自身で発見できたことなどあれば教えてください。また、上映されるシアター環境によっても変わってくると思うのですが。

▼弥栄　音編集で何十回もみてるので、もうわかりません（笑）。いまだ効果を足したり引いたり移動したりしようかなと思ったり……。ただ試写でシアター環境でみた時はニヤリとしました。

――「音響」というパートは、目には見えないし、言葉ではなかなか伝えにくい部分ではありますが、シアターで観てはじめて体感できる、本作の大きな魅力のひとつだと思います。これから本作をご覧になる観客の皆さんに向けてメッセージをお願いします！

▼弥栄　『天使突抜六丁目』にはいろんな要素が見え隠れしています。フレームの中はもちろん、立体音響がつくる空間にも、この地図にない不思議な街や山田監督のシュールな世界がひろがっています。劇場だから出せるダイナミックレンジ。劇場の繰り出す大きな音だからこそ小さな音のこだまがしみ込んできます。

〝京都連続〟第1弾の『堀川中立売』（2010年／柴田剛監督／シマフィルム製作・配給）は、ライブハウスでバンドをみているような体験ができる映画でしたけど、この〝京都連続〟第2弾の『天使突抜六丁目』は、プラネタリウムで星をみているような空間が創出されます。是非、劇場に来て、チルアウトしてください。

――予算や製作形態など、現実的な側面が常にありつつ、山田監督と渡邉さんの創意工夫が作品のなかに込められているということがよく分かりました。おふたりの創造的な発展が近いうちに実現するものと切に願っています。その前に、本作をぜひ少しでも多くの方に観ていただきたいわけですけれども、最後に「音楽」というパートは、目には見えないし、言葉ではなかなか伝えにくい部分ではありますが、シアターで観てはじめて体感できる、本作の大きな魅力のひとつだと思います。これから本作をご覧になる観客の皆さんに向けてメッセージをお願いします！

▼渡邉　音楽によって画の見え方は大きく変わります。多くの映画がお決まりの音楽で場を盛り上げるのに対し、本作では映画音楽の在り方に対しても、新しい提案が出来たと思っています。あと何度も言いますが、監督の効果音と音楽の配置は完璧です。とは言え、観る時は難しく考えずに愉しんでください。

◆音楽・渡邊　崇（わたなべ・たかし）

1976年、広島生まれ。作曲家、音楽プロデューサー。これまでに音楽を担当した平林勇監督映画『BABIN』『aramaki』『shikasha』『663114』がそれぞれ、ロカルノ、ベルリン、カンヌ、ベネチア等に招待、ノミネートされる。現在TVで彼の手掛けた音楽を耳にしない日はないと言ってよい程のTVCM楽曲を手掛けており、また、様々なサイレント映画にオリジナル楽曲を「サウンドトラック」としてつくり、生演奏付き上映を行なう「Sound On Film」のイベント（不定期開催）をプロデュース・オーガナイズするなど、その創作と活動は多岐に渡る。映画音楽の最新作は『ハラがコレなんで』（石井裕也監督・仲里依紗主演）。また「SOIL」をはじめオリジナルアルバムも多数リリースしている。

▶WATANABE Takashi　http://nikakari.com

天使突抜六丁目の世界展

於◆K's cinema 劇場ロビー
時◆『天使突抜六丁目』上映期間中

実際には存在しないはずの天使突抜六丁目の迷宮的な世界が、現実界に出現します。
いつ?どこで?言うまでもありません。「映画」を観に劇場へ来たつもりのあなた……普段と同じに見える劇場のフロアが、何かちょっと違うと感じませんか?
そこはすでに、「映画」の中の世界です。ようこそ、地図にない街へ。ここが天使突抜六丁目です。

01▼▼ ストーリーイラスト展「みゆき妄黙録記」

◉画・文:山田雅史
『天使突抜六丁目』監督の山田雅史自らが、本作のアナザーストーリーを6点のイラストに描きました。ご覧になる際は、「一枚ごとに「二丁目、二丁目…」と数えながら眺めてください。

02▼▼ 山田雅史新作絵画制作展

◉絵画ライブ制作:山田雅史
黙々と絵を描く男の姿があったりなかったり。その絵はいつ完成するのか、その男の正体は誰か。絵を描く男を見かけたら、勇気を出して話しかけてみてください。

- 11月19日(土)12:30〜18:45の回終了まで
- 11月20日(日)13:00〜18:45の回終了まで(*途中退場あり)
- 11月26日(土)13:00〜18:45の回終了まで(*終了時間は変動あり)
- 11月27日(日)13:00〜18:45の回終了まで
- 12月3日(土)13:00〜18:45ごろまで(*終了時間変動あり)

03▼▼ soundscape for 天使突抜六丁目

◉装置:弥栄裕樹(『天使突抜六丁目』音響)
謎の装置「テンミン」が、あなたの手で動かされるを待っています。

04▼▼ 彼岸と此岸の境界線「赤い小石」と、天使の羽根入り「化石の石(ノジュール)」

◉装置:チームTENTSUKI
赤い小石の境界線を跨いだり、天使の羽根がはいったノジュールを撫でてみてください。

05▼▼ 仁丹町名看板

◉作:西村立志(『天使突抜六丁目』美術) 提供:森下仁丹株式会社
実在しないはずの番地の町名看板が、ここに。

K's cinema トークイベント開催!

11/26【土】【監督対談】黒沢清 vs 山田雅史

◆11/26(土)16時40分の回上映終了後
◆トーク
登壇 黒沢清(映画監督) × 山田雅史(本作監督)

PFF入選作、CO2助成作品などで知られる山田監督のインディペンデント時代から、その映画的才能と魅力を見出していた黒沢清監督と、本作を独自の美しい世界観で創り上げた山田監督との対談を行います。卓抜した映画原理と映画史観を元に繰り広げられる黒沢監督からの鋭い言及から、本作『天使突抜六丁目』、そして山田雅史はいかにして立ち向かうのか!?この場で目撃ください!

12/3【土】磨づくしDAY

◆12/3(土)13時30分の回上映終了後
◆トーク
登壇 磨赤兒(出演) × 山田雅史(監督)

本作の、他では絶対にあり得ない、妙に気になるキャスティング。その絶妙なキャストアンサンブルの代表格であり、日本映画界が誇るバイプレーヤー、そして舞踏を世界に広げ続ける〝快男児〟、磨赤兒さんをお招きして、本作について、これまでのご活躍について伺うトークを行います。お相手はもちろん山田監督。トーク終了後、先月出版されたばかりの磨赤兒さんの著書「快男児・磨赤兒がゆく」(朝日新聞出版)サイン会も開催!劇場で本書をお買い求めの方に磨赤兒さんから直筆サインをしていただけます!また、本作で磨赤兒さん扮する〝赤鬼〟が奇跡のグッズ化を果たした「赤鬼キャンディ(磨飴)」も劇場で販売しております。
この機会にあわせてどうぞ!

磨赤兒さんサイン会(トーク終了後、劇場ロビーにて)

◀磨赤兒

作品レビュー

何より目をひくのは映画のあちこちに出現する「窓」だ。時に抑圧的に、時にユーモラスに窓は内と外との境界をきわだたせる。窓に向かってぽつんと坐る人形化した男の表情がとりわけ印象的だった。彼はいったいどうやればこの窓を軽々と超えることができるのか・・・。やがて山田雅史の一貫したテーマ「暴力」と「脱出」があり、映画は驚異的な終局に向けて突き進む。「天使突抜」の意味が鮮やかに理解されるのはここからだ。現代日本映画がこれほどまでに神々しくあることが可能なのかと、私はあらためて驚嘆した。

―― **黒沢 清**(映画監督)

ブルーグレイの色味のような不安とやさしさの印象の映像美と、作品全体を覆うまるで効果音のような時に癒やしの、時にヒステリックな音楽が、この作品の浮遊感を象徴しているように感じられる。この作品の中の「天使」はそのシーンとは関係なしに、蒼い夜明けや蒼い夕刻に現れるそれのようだ。好きな人と共にどこかへ逃げる、というロマンチックなシークエンスはこれほど甘美なものなのかと思わせられるが、そのロマンスは短く、ファンタジックな中に現実のシビアさがオーヴァーラップする。脚本的にも、設定の割に普段わたしたちが日常話しているようなセリフが多く、最初から甘めのファンタジーを期待する人は裏切られるだろう。天使突抜町が京都に実在する町であることから架空の町の発想を得たというが、ほとんどが標準語で、現実の京都の閉鎖感とはまったく異質な、作品独特の閉鎖感となっている。主人公の男は、作品の中での始まりと、残酷ゆえにますます美しいラストシーンのあとではどのような心境的変化を成したのであろうか、と考える間も許さず本作品は終わりを告げる

―― **戸川 純**(歌手・女優)

歩行者は警備員の誘導によって道路工事を知覚する。彼らがいなければ、目の前の工事に気づきもしない。しかし警備員の慧眼をもってしても当の警備員自身が道に迷ってしまうのだから、「実在」するというその町の住環境のいびつさは強烈だ。工事は道路を造り、道路は次の工事のために伸張してゆく。その循環構造の中で心細く屹立する警備員は、「絶対逃げられへんぞ」という声を背負い、どこまで逃げてくれるのだろうか。

―― **冨永昌敬**(映画監督)

超現実主義(シュルレアリスム)画家・山田雅史は、18歳で映画作家になってより映画の現実時間に身を座していたように思う。油臭い労働者、マグロ、そして警備員―ヒザから地面の抗いがたい重力に囚われ、やがてこの世の底へ下る坂を駆けていく主人公のように。
警備員、タクシー運転手、清掃夫、と言うらしい。
人が一生の最期に選ぶ部屋「終の棲家(ついのすみか)」を職業に言い換えた、終の仕事。
晩年に会社を追われ金も残らず、人生の最期をつなぐ仕事。疲弊と恐怖とは時間と共に増し、この映画の杉本の言うとおり、確かに人を変えていく。都心に出て5年、警備をしながら映画を続けている僕はそう実感する。
山田雅史の画を、映像に加える迷宮じみた色彩変調を観れば、現実がもう少し塗り替えられることを思う。しかし山田は倦怠が人を狂わせんばかりの時間にいまなお身を置く。
映画を志したそもそもの動機―絵画は風に揺れるブランコを描くことは出来る、しかしブランコを揺らす風の時間は映画にしか描写できない―と山田がかつて語っていた倦怠極まりない時間を信じるかのように。
『天使突抜六丁目』は永い倦怠極まる現実時間の最後、超現実を目撃しようとする。

―― **木村文洋**(映画監督)

BOOK OF 天使突抜六丁目

※映画パンフレット 『天使突抜六丁目』上映館にて販売

POSTER OF 天使突抜六丁目

価格:500円(税込) 『天使突抜六丁目』上映館にて販売

顔はコワいが味はアマい!!
赤鬼キャンディ《磨飴》

価格:100円(税込) 『天使突抜六丁目』上映館にて販売

●東京
2011年11月19日よりロードショー
新宿駅東南口階段下ル 甲州街道沿ドコモショップ左入ル
新宿 K's cinema 各回入替整理券制
TEL:03-3352-2471 www.ks-cinema.com
11/19〜12/2までは、連日12:30/14:35/16:40/18:45(4回上映)
★12/3(土)以降の時間は劇場までお問い合わせください。

●大阪
2011年12月17日よりロードショー
梅田スカイビルタワーイースト4F
梅田ガーデンシネマ
TEL.06-6440-5977
★初日、監督・キャストの舞台挨拶アリ!

●京都
2012年1月2日よりロードショー
四条烏丸下る西側・COCON烏丸3F
京都シネマ
TEL.075-353-4723
★初日、監督・キャストの舞台挨拶アリ!

●神戸
2012年陽春ロードショー予定
神戸高速「新開地駅」東出口より徒歩5分
神戸アートビレッジセンター
TEL.078-512-5500

●愛知
2012年陽春ロードショー予定
千種区今池1-6-13今池スタービル2F
名古屋シネマテーク
TEL.052-733-3959

以降も全国劇場巡回予定!

※上映スケジュール、各イベントの詳細は『天使突抜六丁目』公式サイトをご確認ください。 http://tentsuki6.jp/